

## 第4回 B・ピウスツキ国際会議に参加して

井上 絃一

ブロニスワフ・ピウスツキの百年忌とポーランドの独立回復百周年を祝して、第4回 B・ピウスツキ国際会議(以下4IBPCと略記)がポーランドの古都クラクフの日本美術技術博物館 Manggha と、シレジアの工業都市ジョリの市立博物館で開催されました(2018.10.18-20)。

10月17日午後6時、Manggha 館の特別企画展「アイヌ、グラレー[トラ山地民]そしてブロニスワフ・ピウスツキ」の開会式が博物館ホールで挙行され、ワルシャワから駆けつけた川田司日本大使が祝辞を、B・ピウスツキの孫木村和保さんが謝辞を述べました。その後のレセプション会場は久闊を叙する旧知や初対面を喜ぶ人々で賑わいました。

18～19日のシンポジウムは「歴史と文化」「博物館とコレクション」「言語と文学」「ブロニスワフ・ピウスツキ」の4セッションに分かれて延べ18件(日本から6件[2件のビデオ上映も含む]、ポーランド5件、ロシア4件、スイス2件、イタリア1件)の報告と質疑応答が繰り広げられました(POLE96-1p.4 プログラム参照)。

18日昼下り、私たちは市電を乗り継いでトポロヴァ通り18番地へ赴き、ピウスツキ兄弟旧居の壁面に設置されたブロニスワフ顕彰板の除幕式に参列しました。そこには弟ユゼフを顕彰する金属板が既に掲げられていますが、今回ポーランド初の兄の顕彰板が戸口の左肩に追加されたわけです。

午後7時、アマレヤシアターの舞踏劇「ノマディック・ウーマン Nomadka」が Manggha 館地下講堂で再演されました。ドラマの原素材は、グリーンランド生まれの「ノマド」の少女(ルイズ・フォンテイン)が、デンマーク本国の里親に引き取られた異郷で差別と暴力の充満する流浪の旅の末、ノルウェー北部の大自然とサーミ文化の中で彼女本来の生と尊厳を取り戻すという、苛烈な「ノマドの女」の物語です。ルイズからその生き様を聴取したポーランドの舞踏

家カタジナ・パストゥシヤクは壮絶な舞踏劇を創出しました。初演は2012年12月11日ポーランドのグダンスク。2014年4月13日に同地で再演、7月5日には東京・両国の第11回シアターX(カイ)国際舞台芸術祭でも招致上演されました。アマレヤシアターは2017年11月30日～12月1日、札幌で開催の国際先住民族芸術祭に招聘され、南区小金湯の札幌市アイヌ文化交流センター(サッポロピリカコタン)で公演、好評を博しました。構成・演出担当のカタジナはルイズとともにダンサーとしても熱演、アイヌの女性(松平亜美、恵原詩乃)も共演しています。クラクフ公演はその再演というわけです。

19日の第4セッションに登壇したダヌータ・オニシュキェヴィチさん(ユゼフ・ピウスツキの曾孫)は、大伯父ブロニスワフが敢行した「ほとんど世界一周の旅」の足跡を忠実にたどる「一人旅計画」を披露しました。文化人類学専攻のダヌータさんは旅の仔細をビデオに収め「電子時代のエスノグラフィー」(彼女は web documentary と称します)を仕上げるとの大志も開陳しました。2020年当初にはダヌータさんが日本に上陸し皆さんの誰かを取材するかもしれません。その節はどうかよろしくお願いします。

今回は組織委員会の呼びかけに応え、2篇のビデオ作品が日本から寄せられ会議の殿を務めました。その一は長屋のり子さんが自作長編叙事詩「盲いたチュフサンマの絶唱～その悲歌、哀歌そして挽歌～」を朗読した映像です。会場には日本語原文、安藤厚さんの英訳、ジョリ市立博物館によるポーランド語訳が配布され、全篇が上映されました。その二は北海道テレビ制作番組「嘘塗りの骨～アイヌ人骨返還問題の悲痛～」に丸山博室蘭工大名誉教授が英語字幕を加えた記録映像です。いずれの作品も深い感銘を醸し、会議の趣旨にふさわしいフィナーレとなりました。



①Manggha 館特別展, 木村和保と松本照男 ②ピウスツキ兄弟旧居前で顕彰板除幕式 ③和保とダヌータ >伯父と姪<



④アイ・コタンのタテコセ ⑤ブロニスワフ記念碑と筆者 ⑥ユゼフ・ピウスツキ博物館旧館前で、右端がスーペウ館長

私たちは除幕式から帰館後、特別展の見初めを行いました。展示を担当した学芸員アンナ・クルールさんは、平取町立二風谷アイヌ文化博物館からアイヌ資料、ザコパネのタトラ博物館からはピウスツキ収集のグラレー資料を借り受けて、見事な三題嚙の構築に成功しています。

私が特に注目したのは、アンナさんがクラクフの文書館で新たに発見したピウスツキ写真コレクションで、展示された1葉の写真の前で足が釘付けとなりました。サハリンの研究者や私がバフンケと紹介してきた人物の写真に「アイ村、37 才、タテコス wieś Aj 37 l. Tatekos」と注記してあったからです。タテコセトテコセはブロニスワフの岳父シレクア、その弟バフンケの末弟ですから、われわれの誤謬はもはや明白です。この画像はネット上でも広く流布していますので、まずはこの場をお借りして謝罪と訂正をさせていただきます。

Manggha 館は特別展へ向けてポーランド語・英語併記の図録を公刊しました(アンナ・クルール編『アイヌ、グラレーそしてブロニスワフ・ピウスツキ』240 頁、2018)。同展は 2019 年 1 月 20 日に閉幕します。

10 月 20 日午前 8 時半、私たちは貸し切りバスで第 2 会場のジョリ市へ出立、2 時間余りで市立博物館に到着しました。古くは交通の要衝として、また炭鉱都市としても栄えたジョリが、今は政財界一丸となって新しい発展戦略を模索中で、同戦略の一環となる観光立地の中核を担うべく市立博物館が設置されたようです。

私たちはまず、2018 年 5 月 22 日に除幕されたばかりのポーランド初のピウスツキ記念碑に詣でました。1903 年の北海道アイヌ調査の盟友ヴァツワフ・シェロシェフスキの銅像が絶妙な距離で対面して建てられています。同館は世界各地の研究に貢献したポーランド人の顕彰プロジェクトを推進しており、顕彰碑建立は今後も予定されているそうです。

4IBPC の第 5 セッションでは市立博物館の趣旨・実績そして抱負についてブハリク館長以下 2 名の館員が熱弁をふるいました。館長は 2 度にわたって来道し、アイヌの実態調査やアイヌ資料収集を

試みたほか、欧州の骨董屋からの関係資料購入にも尽力されました。同館は今やポーランドで最大、120 点強のアイヌ資料を収蔵しています。折しも特別展「ブロニスワフ・ピウスツキから萱野茂の時代にかけてのアイヌの世界」(2018.5.19-11.11)が開催中で、私たちは館長の案内で同展を熟覧しました。市立博物館は特別展と同名の図録(ルツィアン・ブハリク編、363 頁、ポーランド・日本・英語版、長屋さんの詩作も収録、2018)も上梓しています。

4IBPC の参加者は 20 日夕刻、貸し切りバスでクラクフへ戻りました。

その後、木村和保さんと私は松本照男さん(ワルシャワ在住ジャーナリスト)の案内でザコパネのタトラ博物館を訪ねました。同館はブロニスワフの生誕 150 周年を期して特別展「ブロニスワフ・ピウスツキ～元帥の非凡な兄」(2016.6.15-11.13)を挙げています。10 月 23 日の夕べ、アンナ・ヴェンデ=スルミヤク館長は和保さんの講演会を企画、参集した聴衆はブロニスワフの孫の話に興味津々で、多彩な質疑応答が交わされました。その際、択捉島の土着アイヌの末裔・三和昭子さんが意表を突いて名乗り出られ、興味深い出会いができました。ポーランド在住歴 30 年で、近郊のノヴィ・タルクでペンションを営む三和さんは、講演会の知らせを聞くや愛車を駆って馳せ参じられたのです。

私たちは 10 月 25 日、ワルシャワ郊外スレユーヴェクのユゼフ・ピウスツキ博物館を訪問しました。既に着工された新館建設の進捗状況の確認が目的でした。ロベルト・スーペウ館長によると、新館は地下 3 階・地上 2 階建て、地下部と 1 階の工事は終了しているが、2 階と地表部の整備にあと 1 年を要し、来秋に竣工予定とのことでした。本来なら 4IBPC は今秋完成する新館で開催されるはずでした(2013 年 10 月に来道された際のクシニョフ・ヤラチェフスキ前館長談)。その後に館長の交代があり、開館も 1 年先延べとなりましたが、前館長の口約はいずれ果たされるでしょう。

(いのうえ・こういち 2018.12.26 札幌)

(photo⑤by Philippe Dallais, 他の写真は松本照男)